『中学教育』一九七一年十一月（小学館）

〝能力差〟とは何か

教師の幻想ではないか

矢口　新
能力開発工学センター所長

能力差というのは何だろうか。

世の中には同じ人間はふたりとないというように考えれば、する仕事にもちがいがある。同じ仕事をさせても、その速さにもちがいが出てくるし、そのできあがりにもちがいがある。結果ばかりでなく仕事のしかたもまたちがう。人間の行動のちがいがあらわれるのであろう。それを何かの尺度をおいて比べるとすると、そこに差というものが見えてくる。速さという尺度で比べて、速い順に並べる。ここで能力ということばが使われる。速いものは能力が高く、遅いものは低いなどという。仕事の速い遅いや結果のあらわれ方のちがいは、その人の神経の働き方、働かせ方のちがいと考えられるから、その神経の働かせ方を能力ということばで表せば、能力のちがいという言い方でもよいであろう。

そこで、神経の使い方のどこが仕事の遅い原因かを見て神経の使い方を訓練すれば、速いスピードで仕事ができるようになるであろう。能力差などという概念を使うのは、こういうためであって、ある時のその人間の神経の使い方がどうかを見るのである。能力つまり神経の使い方は訓練によってどんどんのびて行くから、その人間についてその実態をつかむことはたいせつである。しかしもう一歩進んでよく考えてみると、差などということばを使う必要があるだろうか。AとBとが差があるということが問題なのでなく、A、Bそれぞれについてその神経の使い方がどうなのかをつかむことが教育をする上に必要なのである。ある仕事をある速さとある精度でするには、必要な神経の使い方がある。それがどこかで欠けていれば、一定の速さと精度に達しない。そこを発見することが能力を見るということである。それは、A、B、Cという人間をならべてその差を見るということとは根本的にちがうことである。ならべて差を見ても、相対的な尺度ではなんら教育に役にたつものはとらえられない。

たとえばAは五分、Bは四分で仕事をしたととらえて、そこでAの能力が上でBの能力が低いといってもみても、何の役にもたたない。つまり、相対的に能力の差を見るなどということは、教育者のなすべきことではないのである。ひとりひとりの神経の使い方のどこが問題なのかを明らかにするという努力をすることが、教育者のする仕事である。

もういいかげんに差などというとらえ方をするプリミティブな段階から脱出しなくてはならない。実は差といっているその指標は何かといえば、それはたいてい何かの相対的な数値である。単に得点である。それは能力がどういう状態かということについては、何も語ってはいないのである。頭の働かせ方、身体の使い方、要するに神経の使い方がどうなのかを少しも語っていない。それで人間を等級づけして

みても、それだけであって、教育上の処置のしかたは生まれてこない。だから能力別の学級などというものをつくっても効果があがらない。もしあがった例があるなら、それは能力差によって分けたからではなく、全く別のこと、その一人一人の神経の使い方をよく調べてその指導をしたからである。そのひとりひとりの能力の実体をとらえるということは、差などというところにこだわっていては不可能なのでる。

　そればかりか、差がある、差があるということばかりが目について、それに対する処置がなされないか、あるいは能力別指導などというみせかけばかりをやっていると、人間は生まれつき差があるのであって、教育のしようがないのではないかと考えるようになる。多くの教師が能力は生まれつきだから、能力の低いものにはあまりむつかしいことを教育しないのだなどという、一、二世紀以前の人間観をもっているのはそういう結果である。能力差というのが教師の幻想になってしまっているのではないか。